

千野隆司

秋の調べ

船頭岡つ引き控

しら



あき しら せん どう おか び ひかえ
秋の調べ 船頭岡っ引き控

ち の たか し
千野 隆司

学研M文庫

2013年9月24日 初版発行



発行人——協谷典利

発行所——株式会社 学研パブリッシング

〒141-8412 東京都品川区西五反田2-11-8

発売元——株式会社 学研マーケティング

〒141-8415 東京都品川区西五反田2-11-8

印刷・製本——中央精版印刷株式会社

© Takashi Chino 2013 Printed in Japan

★ご購入・ご注文は、お近くの書店へお願いいたします。

★この本に関するお問い合わせは次のところへ。

・編集内容に関することは——編集部直通 Tel 03-6431-1511

・在庫・不良品(乱丁・落丁等)に関することは——

販売部直通 Tel 03-6431-1201

・文書は、〒141-8418 東京都品川区西五反田2-11-8

学研お客様センター『船頭岡っ引き控』係

★この本以外の学研商品に関するお問い合わせは下記まで。

Tel 03-6431-1002 (学研お客様センター)

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

本書の無断転載、複製、複写(コピー)、翻訳を禁じます。

本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内の利用であっても、著作権法上、認められておりません。

複写(コピー)をご希望の場合は、下記までご連絡ください。

日本複製権センター TEL 03-3401-2382

<http://www.jrrc.or.jp> E-mail: jrrc_info@jrrc.or.jp

® <日本複製権センター委託出版物>

目次

夏夜のお多福

5

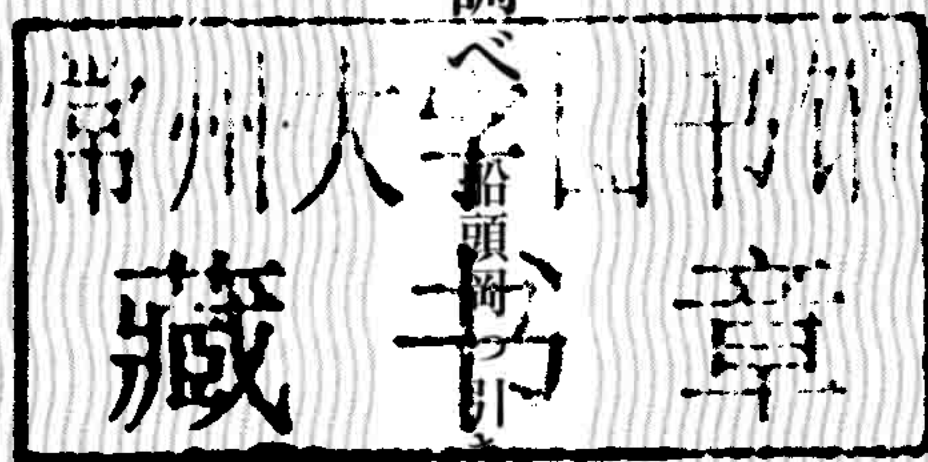
船端の草蜉蝣

97

秋の調べ

197

秋の調



へ
鉛頭岡
つり
き控

千野隆司

学研M文庫

目次

夏夜のお多福

5

船端の草蜉蝣

97

秋の調べ

197

本書は文庫のために書き下ろされた作品です。

夏夜のお多福

一

夏の夕日は、傾いているのになかなか沈まない。強い日差しが、川端に並ぶ家々の間から照りつけてくる。舟の艀ちゅうを握っていると、前に遮さかるものがないので焼けつくようだ。

おまけに揺れる水面みなもが、ぎらぎらと日差しを跳ね返してくる。ときおり川風が渡ってゆくのが、せめてものことだった。

被すげっている菅笠がさははずせない。それでも日焼けして、霧太郎きりたろうの顔や体は夏でなくても浅黒い。

「目鼻立ちの整った男前なんだけどねえ、夜になるとどこにいるんだか分から

なくなるよ」

近所の湯屋のおかみさんにからかわれる。暑くても寒くても、艀を握って舟に乗っていた。物心ついたときから艀を握っているから、なければ物足りなく感じた。

船着場からずっと水面に滑り出してゆくときの、爽快感がたまらない。

狭い川や掘割から大川へ出たときの、遮るものの何もない広々とした川面を見るとき、水の流れに乗って川を下り岸辺の景色がみるみる変わるのを目の当たりにするとき、逆流に逆らって川上の目的地に辿り着いたとき、ああ、船頭をしていてよかったなと思う。

同じ景色でも、その時々で姿を微妙に変える。季節に関わりなく、昨日とも一昨日とも違う何かが岸辺の姿に表れる。それに気づいたときの喜びは大きかった。

霧太郎は、日本橋小網町三丁目の行徳河岸では、知らぬ者のいない船宿川澄の船頭である。主に遊里吉原の手前山谷堀への送り迎えをする舟だが、客が望めば江戸のどこへでも舳先を向けた。

行徳河岸界隈には、七軒の船宿があつて、朝夕は遊びの客で賑わう。吉原へ

繰り出す者だけでなく、商談や休憩に宿を使う者もあった。

船宿川澄の建物が、近づいてくる。前の船着場で、宿のおかみであるお珠^{たま}が客を送り出そうとしているところだった。

霧太郎が漕^こいできたのは、客を送って山谷堀まで行ってきた返り舟だ。これから夜が更^ふけるまで、何度も行き来をすることになる。

お珠は気働きの利^きく愛想のいいおかみとして、客の評判がよかった。客のそれぞれに笑顔に向け、ちやうど最後の三人目が乗り終わったところである。

川澄には大小四艘^{そう}の舟があつて、霧太郎を含めた四人の船頭が交代で漕ぐ。停まっている舟に乗る三人の客のうち、二人は霧太郎も知っている馴染^{なじ}みの客だった。

そこへ歳の頃は三十半ば、小太りの女が土手から船着場に下りて、舟に駆け寄った。

「旦那さん」

そう呼びかけたのに違いない。必死な面持ちで、客の一人に声をかけた。

客は川澄の顧客で、同じ小網町の一丁目^{げだ}で下駄^{げた}商い^{ごまえ}をしている狛江屋^{やごましち}狛七という三十三歳になる男だ。女はお鴎^{ときき}という名の、狛江屋の女中である。

霧太郎の舟は、間近まで近づいていたが、さすがに話の中身までは聞こえない。ただ何か訴えている気配だった。お珠には話が聞こえるらしい。顔付きから笑顔が消えている。

しかしうるさそうに聞いていた狛七は、小さく手を振って何か言った。お鵜の申し出を断った気配だった。

船頭に声をかけると、舟は滑り出た。

霧太郎の舟とすれ違って、大川の方向へ進んで行く。

お鵜はわずかの間、しょんぼりとした気配を見せたが、すぐに我に返ったという顔で船着場から走り去った。霧太郎の舟が、船着場に着いたのはちょうどそのときである。

空舟がもう一艘残っている。霧太郎は舟に常備している鉤繩かぎなわの先を投げて、杭くいに食い込ませる。縄を手繰たぐって、残っている舟の間に漕いできた舟を寄せた。少々離れていても、投げる鉤繩は百発百中だ。

「ご苦労さん。もう少ししたら、また山谷堀まで行ってもらうことになるよ」お珠は、霧太郎に笑顔を見せて言った。

吉原への客は、これから多くなるのが毎日のことだ。一息入れる間もなく、

行き来をするようになる。

四つ（午後十時）になると町木戸が閉まる。それ以降の客は、ほとんどが舟で帰りがった。それを迎えにゆくのも大切な仕事だった。

「狛江屋さんに、何かあったんですか」

気になっていた霧太郎は、お珠に尋ねた。

「昨日から風邪気味だったお花ちゃん^{はな}がさ、ちよつと前から熱が高くなったらしくてね。吉原行きをやめてもらえないかって、言ってきたんだよ」

ふうと、溜息を吐きながら言った。

お花ちゃんというのは、狛七の五歳になる娘である。狛七は三年前に女房を病で亡くして、父一人娘一人の暮らしをしていた。爺さん婆さんもない。店では十六になる小僧を一人使っていて、お鵜は住み込みの女中として狛江屋で働いていた。

狛七は下駄屋の主人であると共に、職人でもあった。誠実で確かな仕事をするといいことで、商いは順調だと聞いている。月に二度か三度の吉原通いだけが、玉に瑕^{きず}だと近所では噂^{うわさ}をしていた。

「困ったものですね」

「お花ちゃんは、ときどき高い熱を出すことがある。でもいつも、次の日にはけろっとしている。だから今夜も同じようなものだろうって、狛七さんは聞かなかったというわけだね」

やれやれ、といった感じだ。船宿のおかみとしては、やめろとは言えない。「なるほど。でもまあ、お鶴さんがついていきますからね」

と、そんなことを話しながら、川澄の建物に入る。建物の二階にあるいくつかの部屋には、これから吉原に向かう客が、茶や酒を飲んだりして一休みしている。

談笑する声が聞こえた。

お珠の亭主であり、川澄の主人次右衛門は、その客の相手をしているようだ。それらの客を送り出しても、また次の客がやって来る。

霧太郎にとってお珠は、流行り風邪をこじらせて二年前に亡くなった、父^{くわ}藏の姉にあたる。

母のおるい^いが心の臓の病で亡くなったのは十四年前、霧太郎が十歳のときだ。お珠には子がなく、片親となった幼い甥^{おい}の面倒を親身^{しんみ}になって見てくれた。不憫^{びん}に思ったのだろう。

父親の歟蔵は、小網町や小舟町、堀江町といった町々を縄張りにしていた岡っ引きで、家を留守にすることが多かった。寂しかったので、霧太郎は川澄に入り浸っていた。遠慮のいらない家だった。

船頭としての腕は、次右衛門が仕込んでくれた。初めは遊びのつもりで艀を握らせてもらっていたが、いつの間にか本業になってしまった。

今では艀扱いで、仲間の船頭には負けない腕を持っていると自負していた。次右衛門についてあれこれと舟に乗って出かけたから、ご府内の川や掘割ならば、艀が一本あればどこへでも行ける。

それは陸おかを行くよりも確かだった。

歟蔵が亡くなったとき、南町奉行所定町廻り同心じようまちまわの浦部三五郎うらべさんごろうから手札てふだを受けて、岡っ引き稼業を引き継いだ。だから霧太郎は、二足の草鞋わらじを履はいていることになる。

「まったく、男なんてしょうがないね。自分のやりたいことばっかりが、先にいっちゃうんだから」

玄関先に入るとお久実くみがいて、かなり怒った顔付きをしてお珠に話しかけた。お久実も狛七とお鵜のやり取りを見ていたようだ。話を聞いていたのかもしれ

ない。

「まあ、そんなにかつかつしないでね」

お珠は取り合わず、二階の座敷に上がっていった。

十七歳になるお久実は、次右衛門の妹の娘だ。家のある神田富松町から、三日に一度くらいの割でやって来て、手伝いをしたりお喋りしゃべをしたりしていた。

父親の甲兵衛こうべえは櫛職人くしで、仕事にも子育てにも厳しい男らしかった。がみがみと叱られる。そこへゆくと次右衛門とお珠の夫婦には子がなく、可愛がられるので幼い頃から気軽に遊びに来ていた。

手伝い仕事でもらえる駄賃にも、魅力を感じている模様だ。

「だいたい熱のある子どもを置いて遊女買いなんで、どういう料簡をしているんだろう」

お久実が残った霧太郎に言ってくる。

「まあ、そうだな」

異論はないので、一応頷うなずいておいた。帳場へ行つて、茶を飲むつもりでいる。「本当に男なんて、しょうがないよ」

霧太郎が自分で茶を淹いれていると、お久実がまた言った。お久実とは長い付

き合いだが、茶を淹れてもらつたことは一度もない。

返事はしないで、淹れた茶を黙つて啜る。

男をひとつからげにして、駄目だと決めつける言い方が氣に入らなかつた。氣の強い、生意氣な娘だとずっと思っている。人を責めるとき言葉は、いつものことだがなかなか辛辣だ。

「ふん、自分は得体の知れない宮地芝居の役者に、うつつを抜かしているじゃないか」

口に出せば大喧嘩になるから、これは胸の中だけで毒づく。七つ年下でも、言い争いではかなわないと分かつていた。

お久実は、そろそろ嫁に行つていい年頃だ。にもかかわらず、浅草奥山の宮地芝居に出ている中村大三郎なかむらだいざぶろうという役者に夢中になっている。川澄に手伝いに来るのは、その木戸銭のための駄賃がほしいからにほかならない。

「霧太郎さんも、あんな親仁おやしにならないように、氣をつけた方がいいよ」
大きなお世話だと、これも無視して茶を飲み込むと、それ以上話が續かないように帳場を出た。

「とんでもない奴だ」

あれでは、嫁の貰い手はないぞと考えている。

富士額びたいでは、ぱっちりとした目、肌が浅黒いのを除けば、外見はかなり可愛い。明るく働き者であることも分かつていた。だがこれだけ生意気だと話にならないと、霧太郎は感じるのだ。

そんなお久実のことだが、伯母おばのお珠は怖ろしいことをたまに口にする。

「霧太郎がお久実と一緒にになって、川澄を継いでくれたら、万々歳なんだけどねえ」

困ったことに伯父おじの次右衛門までが、傍そばにいれば首を縦にして頷いている。

「嫌だ、そんなの」

たまたまお久実がいる折りに、お珠がそのことを口にしたことがあった。お久実が間髪を容れず言ったのがこれである。

このときだけ、二人の思いが重なった。

二

朝、山谷堀まで泊まりの客を迎えに行って戻ってくると、河岸の木陰で浦部